

## 解釈学とテキスト：「開放性」の一視点

その他のタイトル	Hermeneutik und Text : eine Sicht zur Offenheit
著者	菅谷 泰行
雑誌名	独逸文学
巻	32
ページ	222-250
発行年	1988-06-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00018332">http://hdl.handle.net/10112/00018332</a>

# 解釈学とテキスト

——「開放性」の一視点——

菅 谷 泰 行

テキスト解釈学 (Texthermeneutik) とテキスト言語学 (Textlinguistik) はどんな関係にあるのだろうか。目立たない形ではあるが、テキスト言語学の急速な成長に呼応するように、解釈学からテキスト言語学へ向けての言及が70年代より断続的に続けられている。その中には、クライン (W. Klein) とナッセン (U. Nassen)<sup>1</sup> のように双方の共調関係の可能性を示唆する者がいれば、全く逆にクルツ (G. Kurz)<sup>2</sup> のように、あからさまにテキスト言語学を揶揄し、否定し去ろうとする極端な意見もある。一方テキスト言語学側に眼を転じるなら、解釈学との関係はやはりここでも一貫していない。コセリウ (E. Coseriu) は、テキスト言語学は解釈学であると断言してはばかりせず<sup>3</sup>、「意味」(Sinn) の生成と理解にテキスト言語学の課題をみる。しかし全く対照的にシュミット (S. J. Schmidt) は、解釈学の長い歴史の中心にあるこの「意味」(Sinn) の語の伝統的使用を拒み<sup>4</sup>。作品解釈に対して辛辣な批判を続けている。

小論の目的は、このように未だ不明瞭な点を多分に残しているテキスト解釈学とテキスト言語学という新旧2つの分野の関係において、特に解釈学がいう「テキスト」とは何かを見極めておくことにある。ここでは、ガダマー (H. G. Gadamer) とリクール (P. Ricœur) という現代解釈学を代表している2人の研究者を取り上げることにする。そして、彼らが語

る「テキスト」の検討を通して、解釈学とテキスト言語学における「テキスト」概念の共通点と相違点を明確にしたいと思う。

## 1

解釈学がいう「テキスト」は文学作品のことである。解釈学はこの作品としての「テキスト」を2つの基本思想によって構成している。1つが、テキストの「開放性」(Offenheit)、そして、もう1つが、経験の「開放性」である。まずガダマーから見てゆくことにしよう。

ガダマー解釈学は人間を歴史的存在とみるところから始まる。ここで言う「歴史的存在」とは、すでに歴史の中に位置づけられている人間のことである。ガダマーによれば、歴史はヘーゲル (G. W. F. Hegel) の用語法でいう「実体」として人間の生を支え<sup>5</sup>、人間は自分の個人的なあり方に先行して、その存在の仕方を歴史によって規定されているのである。ガダマーはこの人間の様態を「帰属性」(Zugehörigkeit)という言葉で表現している。つまり、歴史が私たちに属しているのではなく、私たちが歴史に属しているのである<sup>6</sup>、と。したがって、ガダマーにとって人間の本質は有限性にある。なぜなら、人間は歴史の内に組み込まれ、この歴史の外に出ることができないからである。いつも歴史の中にあり、歴史を基底として生きるしかない人間、この歴史的に制約された人間のあり方をガダマーは自己の解釈学の核心としたのである。

ガダマー解釈学の第2の特質は「理解」の媒体としての「言語性」(Sprachlichkeit)である。現代の解釈学は言語学や言語哲学の成果を多く取り入れている。ガダマーもこの点で、言語を思考のうつつわ、あるいはコミュニケーションの一道具とする古典的見方を排している<sup>7</sup>。人間が歴史に属しているということは、その歴史を構成している文化や言語に人間が属していることでもある。この意味において、ガダマーは人間と世界の出

会いの場を言語とする。つまり、一方でヴァイスゲルバー (L. Weisgerber) が終生提言しつづけた「言語の中間世界」の概念を持ち出しながら、「言語性」が人間の世界経験の基盤であるとするのである<sup>8</sup>。人間は言語を通して世界を解釈し、言語の中にはこの人間の世界経験が堆積している。したがって、言語は人間の存在を映す鏡でもあれば、また「理解」の構造そのものである。なぜなら、すべての理解の問題は言語の問題である。しかも、ガダマーによれば、この言語と理解の関係は、人間が言語を媒介として相互に理解し合うという一般的な意味からだけでなく、「理解のプロセスそのものがまた言語現象である」<sup>9</sup> からに外ならない。ガダマーはこの観点において、言語を理解の中心問題とする。

この言語性とともなガダマー解釈学の大きな特色をなしているものに、理解の歴史性、つまり「先入見」(Vorurteil)をめぐる議論がある<sup>10</sup>。学問的理想からすれば、理解に個人の先入見を持ち込んではいならない。個人の立場を切り離し、客観的に対象を認識すること、これが科学的な態度である。しかし、公正無私な知を理想化した啓蒙主義、更に近代の科学主義を手厳しく批判するガダマーにとって、このような対象の客観的理解は幻想でしかない。なぜなら、ガダマーによれば、歴史的存在としての人間はすでに諸々の先入見を不可避的に身につけてしまっているのである。特定の文化が持っている一定の見方や考え方、またはある時代に固有の価値や規準、これらが先入見として個人的な判断に先行し、その判断のあり方を規定している。したがって、ガダマーにとっては、すべての理解は先入見を通して成立する。そしてこの意味において、理解は有限的かつ歴史的なものである。「理解は、人間の生という存在そのものの本来的性格である」<sup>11</sup>とガダマーが語る時、この理解の本来性とは、この前提なき理解があり得ないことを言い表わしたものに外ならないのである。

ところで、ガダマーが過去の解釈学と訣別するのは、まさしくこの理解の歴史性を提言した点にある。解釈学がそれまで解釈者の歴史性を捨象

し、先入見に左右されないテキストの客観的理解に腐心してきたことはよく知られている<sup>12</sup>。しかし、ガダマーはこのような過去の解釈学の姿勢とは異なり、先入見を是認し、歴史性を肯定する。というよりも、先入見と歴史性こそがガダマーにとっては解釈学の基礎となるべきものなのである。ガダマーによれば、「人間の有限的・歴史的なあり方を正当に扱うつもりなら、必要なのは先入見の概念の根本的な復権と、合法的な先入見があるという事実」<sup>13</sup>を認めることである。そして、解釈学は「自らの歴史性を考慮に入れ」、「理解そのものの中にある歴史の現実性」を明らかにすると、初めて「妥当な解釈学」となる<sup>14</sup>。このような解釈学の方向を、ガダマーは「真に歴史的な解釈学」、あるいは「事実性の解釈学」とも呼んでいる。いずれにせよ、この歴史的な見地に立脚することによって、ガダマーは解釈学の決定的な方向転換を遂げる。つまり、創作者の「意図」(Intention)からの「テキスト」の自立である。

ガダマーにとって、テキストを解釈することは作者の意図を再構成することではない。「テキストの意味 (Sinn) はつねに著者を超えているのである。」<sup>15</sup>換言すれば、テキストの意味は絶対的確定性を有するのではない。そうではなく、解釈者に対して「開かれ」ているのである。ガダマーにおいて、テキスト解釈の前提条件はテキストの「可読性」(Lesbarkeit)<sup>16</sup>であり、テキストはそれを読み得るすべての人に向けて解釈を求めている。だから、解釈者によって異なるテキストの解釈が引き出されることも否定されない。既に見てきたように、解釈者は歴史的な文脈に位置づけられた人間であり、解釈は常に状況に拘束される。したがって、解釈を通して明らかにされるテキストの意味はその状況とのかかわりの中で成立した意味であり、著者が意図した意味である必要はない。この点で、いわゆる解釈学の古典的なパラダイムである「絶対的に正しい解釈」という考え方はガダマーにはない。ガダマーにとって、テキストの意味は一定不変の客体ではなく、解釈によって変容すべき対象なのである。即ち、テキストは「開放

性」を持つ。

さて、ひとまずこのように眺めてくるなら、ガダマーがとらえようとしている「テキスト」が、テキスト言語学的な立場からみた「テキスト」の概念と近似した点を持っていることが理解されよう。まず1つには、ガダマーがテキストの意味を作者の意図に還元しようとしめない態度は大きな意義を有している。なぜなら、それは文学解釈という限定的な枠組の中であるとは言え、テキストを読解のプロセスとしてとらえたことを意味しているからである。本稿の最後で詳しく述べるように、テキストをプロセスとして究明するやり方は今日のテキスト研究一般に見受けられる強い志向である。語用論的見地に立つテキスト言語学では、テキストは客観の対象では最早ない。コミュニケーションの媒介機能として定義される。したがって、そこでの研究の照準は言語的所与としてのテキストそれ自体から、具体的なコミュニケーション・プロセスの解明に移される。だから、この意味で、テキストの意味の超越性を排して、解釈による意味の変容を説くガダマーの見地は、たとえいくつか提出されている批判点を考慮したとしても<sup>17</sup>、今日のテキスト研究において明確に打ち出されているこの方向性と重なり合っていることは確かなのである。そして、このことは次節で論及するリクルールの中にもはっきりと読み取れる現代解釈学の特質の1つでもある。

次にもう1つ、先に記した「帰属性」、及び「言語性」や「先入見」に関する議論が後期ヴィトゲンシュタイン (L. Wittgenstein) の思想とほぼ共通しているとする指摘<sup>18</sup> に注意したい。ヴィトゲンシュタインはいわゆる「言語ゲーム」の着想で知られている。この「言語ゲーム」というのは、ヴィトゲンシュタインの定義によれば、「言語と、言語と織り合わさった諸活動の総体」<sup>19</sup> である。つまり、それは私たちがふだん日常的な生を営んでいる「生活世界」のことなのである。人間は「生活世界」を基盤にして、その上に立って言語活動や社会活動を行なっている。だから、言

語活動は社会生活全体と内的に連関し合っているのであり、この連関をヴァイトゲンシュタインは「言語ゲーム」と呼んだのである。したがってまた、ガダマーが歴史への帰属性として表現したものは、この言わばコミュニケーション活動の前提である「生活世界」のことであり、そこでの言語や先入見の働きを問題化したと言える。そして、この生活世界的な知をやはり同じように主題化しているのが現在のテキスト言語学ではないかと思われるのである。

このことは例えばコミュニケーション・システムの体系的記述を試みているシュミットの「テキスト性」(Textualität)の考え方の中に典型的な形で表われている。この「テキスト性」とは、テキストをテキストにしているもの、つまりテキストをつくり出している諸条件のことである。シュミットはこの「テキスト性」が「行為類型」ないし「伝達類型」として規定できるというのである<sup>20</sup>。即ち、実際のコミュニケーション場面の中で機能する個々のテキストは、特定のコミュニケーション・タイプの遂行形式として類型化できるとする見方をシュミットはとる。しかし、このようなシュミットの見解には、人間の社会生活が間主観的規範に従って営まれているとしたヴァイトゲンシュタインの「生活形式」<sup>21</sup>の発想が影響していることは明らかであろう。人間が相互に営んでいる社会生活は言わばメタ・コミュニケーション的レベルで規則化され、様式化されている。そして、この様式化された生活の諸形式が具体的なコミュニケーション活動の基盤となっているのである。シュミットがテキストを行為類型・伝達類型として定義するのも、このようなコミュニケーションを制御しているメタ・コミュニケーションへの視点があるからに外ならない。そして、この観点は単にシュミット一人に妥当することではなく、テキスト言語学が示している1つの顕著な傾向である。例えば、早くにライブル(W. Raible)とともに、テキストの言語的特性と非言語的特性の区別の必要を唱えたグューリヒ(E. Gülich)も最近の「テキスト型」(Textsorte)に関する研

究では、テキストをはっきりと「複合的な言語行為」と定義している<sup>22</sup>。そして、この言語行為としてのテキストは話者の変更には左右されないと述べているのである。だから、このような点から言えば、ガダマーが掘り起こそうとした解釈学的基底、日常世界の規範や規則性との関連でテキストを考察する立場をテキスト言語学は際立たせているとも考えられるのである。そして、この関連で付言しておけば、聖書解釈に始まるドイツの解釈学とともに、英米系のヴィトゲンシュタインらの分析哲学、テキスト言語学が近年理論上の支えとしているオースティン(J. L. Austin)・サール(J. R. Searle)の発話行為理論が、やはり法解釈の問題に端を発していることはテキスト言語学の思想的・歴史的性格を見極める上で、興味深い視点を提供してくれているように筆者には思われる。

しかしながら、最後に第3点として、このようなテキスト言語学の志向性がガダマーにとっては許容されないことも目に見えている。ディルタイ(W. Dilthey)の歴史理解の方法論を客観主義として退けたガダマーにすれば<sup>23</sup>、テキスト性の精密化は科学主義の幻想にすぎないだろうからである。ガダマーに要求されるのは、理解の方法論や客観化ではなく、理解の存在論である。最初に提示しておいた経験の開放性はこの観点の下に現出する。最後に簡単に触れておこう。

ガダマーがいう「経験」とは、人間の意識の変革を指している。ガダマー解釈学の影響下にあるイーザー(W. Iser)が力点を置いたように<sup>24</sup>、新しい経験をするとは、それまであった古い経験の上に新しい経験を累加することではない。新しい経験はまさにそれまでの経験の構造そのものを組み替えてしまうのである。何かを経験することで自分の考え方に変化が生じ、新しい見地から世界を見ることができるようになる。ガダマーはこのような経験の開放をテキストの解釈に求めるのである。それが「対話」としてのガダマーのテキスト解釈学である。

ガダマーにおいて、テキストを解釈することは、テキストと解釈者の

「対話」である。この「対話」は「事柄」(Sache)をめぐって取り行なわれる<sup>25</sup>。「事柄」というのは、テキストが語りかけているもの、テキストが解釈者に問いかけているものことである。だから、逆に言えば、それは解釈者がテキストの読みを通して主題化した問題、つまり解釈者がテキストに問いかけているものことでもあろう。ガダマーはこのテキストと解釈者との間に繰り広げられる問いと答えの関係を重視する。なぜなら、それが経験の開放を生み出すからである。解釈者は既に繰り返して述べてきたように、自己の状況の外に出ることができない人間である。したがって、解釈者は自分の先入見を知ることができない。このことを彼に告知するもの、それがテキストからの問いかけである。ある「事柄」に関するテキストからの問い、それは自分とは異なる他者の意見であり、立場である。この他者の意見と立場に触れることによって、解釈者は自分の立場と先入見を知る。つまり、解釈者は自己を「理解」するのである。そして、この自己理解こそが経験の開放に外ならない。なぜなら、この自己理解を通して、解釈者は自分の制約された「地平」を超え、新しい視点に立つことができるからである。「自分自身の個性を克服し、さらには他者の個性を克服し、より一層高い普遍性へ高められてゆくのである。」<sup>26</sup>

ガダマーの場合、「テキスト」はこのような意味で「理解」の媒介であり、「意志疎通という出来事を遂行するための一局面」<sup>27</sup>なのである。そして、この観点からガダマーは言語学を批判している<sup>28</sup>。言語学は語ることを可能にする構造のみを扱い、テキストが「語りかけているもの」を問題としないからである。ガダマーからすれば、言語学は経験の開放という最も重要な契機を取り逃がしてしまっているのである。したがってまた、ガダマーにとっては、この「語りかけているもの」に目を開かせてくれる「テキスト」という単位は、言語学の対象ではありえず、あくまでも解釈学によってのみ究明されるべき概念なのである。このガダマーの主張はテキスト言語学との相違点を突くものでもあると思われる。

次にリクールについて見てみたい。リクールには文字通り「テキスト・モデル」と題された論文がある<sup>29</sup>。ここではこの論文を中心にして述べていくことにする。ボルノー (O. F. Bollnow) が指摘するように<sup>30</sup>、言語学や記号論などの他領域の成果を摂取し、総合的な方向を提示しているリクールのテキスト解釈学に対する評価はドイツでも高い。クルツや新しい解釈学の方向を目指しているフランク (M. Frank) の中にもこのリクールの考えが少なからず影響している。しかし、同時に、リクールの「テキスト・モデル」はイーザーの読書理論の基本的な骨組みを先取りしていることにも注意したい。この意味で、これから触れていくこのリクールのテキストへのアプローチはガダマー解釈学の発展的な継承であるとともに、近年の受容者中心のテキスト解釈理論や文学理論の1つの範例と見なし得る資格を有している。

リクールの出発点はコミュニケーションを基点とするテキスト言語学のそれと似通っている。つまり、構造主義と構造言語学への批判からリクールは始めている<sup>31</sup>。「テキスト」の概念を導入するためには構造言語学への批判は不可避的な行程である。なぜなら、それはテキストの定義に直接関係してくるからである。別の機会に触れたように<sup>32</sup>、テキスト言語学では、テキストの定義は大きく2つの視点から操作されている。まず1つが、テキストを「文を超える単位」としてとらえる見方である。次にもう1つが、「コミュニケーションのための機能」としてテキストを解明する方向である。そして、まさにこの2つのことが一部の例外的事象はあっても、ソシュール (F. de Saussure) に始まる構造主義的な言語研究から抜け落ちていたものなのである。ソシュールはラングとパロールを区別する。しかし、「文を超える単位」、つまり「テキスト」はパロールにかかわ

る事象であり、それは理論化不可能な事柄と見なされる<sup>33</sup>。また、コミュニケーションの問題は言語構造に力点を置くかぎり、単に個人的な言語表現の問題として片付けられてしまうのである。テキスト言語学はまさしくこの言語学を久しく支配してきた因襲的姿勢を打破するものとして「テキスト」の概念を提起しているのである。

しかし、ガダマーとの関連で前述したように、このテキスト言語学の立場において、コミュニケーションの媒体として「テキスト」を究明する方向が強く押し出されていることも事実である。テキストを単に文を超える言語現象としてのみ定義した場合、構造主義の重要概念である「相同性」(Homologie)を前提としなければならなくなるからである。つまり、音素・形態素・語・文、そしてこれらの言語単位と「相同的」な関係にある上位概念としてのみ「テキスト」を規定することになる<sup>34</sup>。ところが、このやり方では第一に、「文」という未だ不明確な単位を出発点にして「テキスト」を定義しなければならないため、十分な「テキスト」の定義を導き出すことができない。そして第二に最も重要な点として、テキスト言語学が批判の論拠とすべき構造言語学的な言語の抽象化と理想化の方向を踏襲することになってしまうのである。

このような観点において、テキスト言語学はコミュニケーションの媒介機能としてテキストを考察する立場を取っている。言わばそれは言語を人間の問題と切り離すことなく、あくまで現実的な視点から言語現象をテキストとして解明することである。この立場はテキスト言語学成立の初期より大きな足跡を残してきたプリンカー (K. Brinker) の次の言葉が明瞭に示している。つまり、言語の現実においては、理想の話者＝聴者もいなければ、同質的な言語共同体もない<sup>35</sup>、と。だから、テキストの研究においては、場面やコンテキストはもちろん、「話す主体」の問題が前面に打ち出されなければならない。しかも、この「話す主体」はチョムスキー (N. Chomsky) の「理想の話者」であってはならない。また、ガダマーとの

関連で言えば、現実を飛び越えたフッサール (E. Husserl) の超越的主体でも、デカルト的コギトでもない。現実の中に織り込まれた人間としての「話す主体」が問題なのである。

さて、テキスト言語学と同様、この「話す主体」を問うこと、これがリクールのねらいである。ただし、リクールが最初に提出するのは「テキスト」の概念ではない。彼がまず提起するのは「ディスコース」(discourse) である。そして、リクールによれば、「テキスト」は「書かれたディスコース」に外ならないのである。

リクールはラングに対してディスコースを対置する。ラングは言語の構造であり、ディスコースは具体的な言語の表現にかかわっている。もちろんこの場合、ラングとディスコースは相互排除の関係にあるのではない。ディスコースは言語構造を前提にして生起する。リクールはこのラングとディスコースの対立において、次の4つの側面を強調している<sup>36</sup>。

- 1) ラングは無時間的である。しかし、ディスコースは時間の内で実現される。
- 2) ラングは主体を持たない。しかし、ディスコースは主体（話者）を持つ。
- 3) ラングは世界を持たない。しかし、ディスコースは世界（状況）を指示する。
- 4) ラングは対話者を持たない。しかし、ディスコースは対話者（聴者）を持つ。

このディスコースの術語はリクールがフランスの言語学者であるバンヴェニスト (E. Benveniste) から借用したものであるが、このようなラングとディスコースの対立の中で、リクールが何を強調しようとしているかは明白であろう。テキスト言語学の視点と同じく、言語体系や言語構造そのものではなく、それを介して行なわれる人間の言語活動への視点の転換である。解釈学はガダマーがそうであったように、歴史と主体の関係を重視

する。だから、言語をただ構造と考え、記号間の差異の中に意味が生成されるとする見方は、この歴史の問題や主体による意味の創造の問題を言語から奪い去ってしまうことになるのである。リクールはこの意味において、言語をディスコースとしてとらえるのである。つまり、上記の4つの事柄で言えば、時間内に生起する具体的な言語現象として、あるいは主体間に交わされるメッセージの交換として、そして、世界や状況を記述し、表現し、表象する働きとして言語をとらえるのである。

ところが、リクールによれば、このディスコースの特質がそのまま「テキスト」の規定に直結するのではない。「テキスト」は書記によって実現された「ディスコース」であり、それは発話、つまり「話されたディスコース」とは区別されなければならないというのである。リクールはこの観点において更に次の4つの側面を強調する。即ち、ディスコースがテキストに移るとき、「テキスト」は<sup>37</sup>、

- 1) 「出来事」(event) から「意味」(meaning) を分離する。
- 2) 主体(話者) から分離する。
- 3) 閉じられた状況から分離する。
- 4) 対話者(聴者) から分離する。

この4つの区別は、イーターが発話を直接的コミュニケーション行為、書記によるテキストの読みを間接的コミュニケーション行為と見た視点と対応している<sup>38</sup>。簡単に要点を押えておくことにしよう。

まず、出来事と意味の区別はリクールの解釈学を理解するための要である。つまり、リクールはここに話しコトバと書きコトバの基本的な相違を持ち出してくるのである。話しコトバは「出来事」として一過性を本質とする。それは現出したかと思えば、消え去ってゆくものなのである。しかし、これに対して、書きコトバは持続性を有している。書きコトバは消え去るものを文字として固定するのである。この固定されたもの、それが「意味」(meaning) である。即ち、テキストはこの「意味」を書きコト

バとして固定するのである。リクールにおけるこの「意味」の語は、彼自身認めているように広義な内容を持っている。ここでは「言語的意味」のことが言われているのではない。リクールの表現で言えば、「言うことの言われたもの」<sup>39</sup>、つまり語用論的な「行為的意味」が意図されている。テキストはまさにこの話者が言わんとしたものを固定するのである。ボルノーもこの観点を受けて、テキストは文字によって何かを固定する。そして、この何かとはそこに「存続」(bestehen)するものであり、理解が不確かなとき、読者は何度でもそこに帰ってゆくことができると述べている<sup>40</sup>。

しかし次に、テキストの意味は話者の意図では最早ない。これは矛盾だろうか。リクールはガダマー以上にこの相違を力説しているように思われる。つまり、直接的な発話と異なり、書きコトバとしてのテキストでは、話者は現前していないのである。読者は著者に対して直接その意図を問い正すことができない。したがって、この時点でテキストは創作者と創作者の意図から切り離されてしまうのである。「テキストが述べているものは、著者が述べようと思っているものよりも重要なのである。」<sup>41</sup>

そして同時に、テキストは状況と世界とを分離する。リクールはここで2つの「指示」(reference)の区別を導入している。1つが、現象学用語としての「直示的」(ostensiv)指示である<sup>42</sup>。「直示的指示」というのは、そこにある事物をこれと直接指差すような場合の指示のことである。だから、それは状況内的な指示である。しかし、リクールは、テキストはこのような直接的指示からは分離されるというのである。テキストは具体的状況から切り離されて、「世界」を指示する。もちろんこの場合、「世界」とは「この世界」のことではない、テキストの前に開かれる新しい「可能的世界」<sup>43</sup>のことである。テキストはこの「可能的世界」を指示するのである。

そして最後に、テキストは対話者から分離する。テキストは特定の誰か

ではなく、それを読むことのできるすべての人に向けて「開かれ」ているのである。

この点で、リクールにおけるテキスト解釈の意味も明らかになるだろう。リクールにおいて、テキストの解釈は「テキストの背後」、つまり作者の意図を復元することではない。また、具体的状況における直接的な対話をモデルにすることでもない。対人的な対話の状況はテキストの解釈では失われてしまっているのである。しかし、テキストはこの対話の状況から切断されることによって「世界」を開く。リクールによれば、テキストの解釈はまさにこのテキストが提示する「世界」へ参入してゆくことなのである。「テキストを理解するとは、意味から指示への運動、つまり、テキストが言っているものから、テキストが問題にしようとしているものを追いかけることなのである。」<sup>44</sup> この「テキストが問題にしようとしているもの」が、ガダマーが表現した「事柄」であり、「可能的世界」である。テキストの「導き」に従い、テキストの「意味の矢」<sup>45</sup>を追い、読者は自分の状況を越えてこのテキストが開示する「世界」へ参画してゆく。言わば、このテキストと読者の相互作用こそ、リクールのいうテキスト解釈なのである。

したがってまた、テキストの解釈は新しい自己理解の契機である。なぜなら、解釈だけが主体に自分自身を理解する新しい能力を与えてくれるのである。ガダマーと同じく、リクールは経験の開放をテキスト解釈の結論としている。読むことを通して読者は経験の構造を変える。読書行為を通して自分を変え、自分の「世界」を超えていくのである。

さて、このようにリクールの「テキスト・モデル」の輪郭を描いてくるなら、テキスト言語学との対立点が1つ判明してこよう。クルツはこのリクールのテキスト概念に依拠する形でテキスト言語学に手厳しい批判を加えている。テキスト言語学はテキストとコミュニケーションそのものとのを同一視してしまっているというのがその理由である<sup>46</sup>。テキスト言語学の

先駆者であるハルトマン (P. Hartmann) が早くに「テキスト」を「第1の言語記号」と呼んだ<sup>47</sup> ところからも察せられるように、テキスト言語学は書記と音声の区別なく、実現された言語表現のすべてを「テキスト」とするとらえ方をしている。しかし、解釈学の視点からすれば、このような広義のテキスト定義は、テキストが「書かれたディスクコース」であるという重要な事実を見逃してしまうことになるのである。クルツによれば<sup>48</sup>、テキストは書記によって実現されているが故に理解の特別な手続きが必要なのである。即ち、テキストは場面に依存する発話行為と異なり、コンテキスト指示を中心とする。そして、テキストは場面性に代わって読者へのシグナルとしてメタ・コミュニケーション情報を規則付け、極めて高度に規範化されているのである。したがって、語用論的見地からコミュニケーション・モデルとしてテキストを一般化してしまうことは、書記的实现形式としての「テキスト」の特殊性を看過することになる。それ故にクルツの立場からすれば、テキスト言語学がいう「テキスト生産」、「テキスト化」といった術語は学問上の明晰性を要求し、テキストをコミュニケーションとして定式化しようとするところから案出されたまさしく非現実的な虚構にすぎないのである<sup>49</sup>。

### 3

さて、現代解釈学の古典ともいべきガダマーとリクールの「テキスト」概念をテキスト言語学のそれと対比させながら論じてきた。もちろん、「テキスト言語学」の学問的な位置付けは未だ確定的ではないし、このテキスト言語学における「テキスト」の定義も一様ではない。ここでは、コミュニケーションの媒介機能として「テキスト」を考察しようとするテキスト言語学の今日際立った動向との関連で、解釈学と対比させたも

のである。そして、その限りで言えば、両者の間に共通の志向性が確認できたのである。テキストを確定的対象としない見方、日常生活・現実世界への配慮、この現実世界に生きる「話す主体」の問題、言語を活動としてとらえる視点、これらは完全に重なり合うとは言えないにせよ、双方に共通する特徴である。クルツの批判にしても、テキスト言語学が書記と音声の違いを無視しているわけではない。最近のプリンカーの研究の中に窺えるように<sup>50</sup>、クルツが示したような批判点をテキスト言語学は考慮しているし、むしろ、書記実現としての「テキスト」を絶対視することの方が非現実的な結果となるのではないだろうか<sup>51</sup>。この点で、解釈学とテキスト言語学の関係については、双方がともにテキストの「開放性」への志向を持っていることを指摘することの方がより重要であると思われる。つまり、テキストを対象化せず、相互コミュニケーションに「開かれた」媒体として考察することである。しかし現在、この「開放性」のとらえ方において、解釈学的思考とテキスト言語学的な立場の間に大きな溝ができていることも確かなのである。最後にこの問題に触れながら解釈学における「テキスト」とは何かをまとめておくことにしよう。

まず1つには、テキストのプロセス性に関する議論がある。解釈学は解釈のプロセスを重視する。テキストの意味それ自体ではなく、テキストが解釈を通して生み出す意味創造のプロセスを強調するのである。そして、この観点はたとえ解釈そのものを対象とするのではないにしても、現在のテキスト理論が取り組もうとしている重要な側面である。なぜなら、ガダマーとの関連で述べたように、コミュニケーションを中心とする方向からすれば、テキストそのものより、テキストの生産と受容の過程を考察することの方がより大きな意味を持ってくるからである。そしてこの方向において、とりわけテキストの受容プロセスの解明に強く傾斜しているのが近年のテキスト研究の特色であると考えられる。このことはテキスト言語学を代表している研究者の多くが、2つの「テキスト」を分別する見方をと

っていることにもはっきりと読み取れる。つまり、所与の「テキスト」そのものと、受容者の介入によって変容を受けた「テキスト」の類別である。

例えば、シュミットは言語的構成体としての所与の「テキスト」そのものを文字通り「テキスト」と呼び、これに対して、受容プロセスないし認知プロセスの中で構成される「テキスト」に「コミュニカート」(Kommunikat)という術語を当てて、両者をはっきり区別している<sup>52</sup>。またダイク (T. A. van Dijk) が表現面における「テキスト」を命題集合ととらえ、この命題集合を「含意テキスト・ベース」と表現し、一方受容者が自分の知識構造の中で情報を補完し、意味論的な整合性を与えたものを「明示テキスト・ベース」と呼んで、2つを区別するのも同一の観点なのである<sup>53</sup>。あるいは、シュルナー (M. Scherner) が「指示集合」としての「テキスト」と、受容者の「操作」によって構成される「テキスト」を類別した発想<sup>54</sup>や、文学研究の中で言えば、イーザーが言語的素材としての「テキスト」をシュミットと同じく「テキスト」と呼び、この「テキスト」と読者の相互作用の全過程を「作品」と定義したのも<sup>55</sup>、すべて同様の出発点なのである。このようにテキストそれ自体から、受容あるいは解釈によるテキストの意味生成過程への視点の転換はテキスト研究の現段階での最も目につく動向なのである。

ところが、ガダマーとリクールの議論を追ってきたところからも明らかのように、このテキストのプロセス性を究明しようとする今日最も際立った方向性の中で、テキスト言語学的思考と解釈学的思考は対立する。それが、ガダマーらの解釈学的思考を継承し70年代の文学理論を先導してきたイーザーに対する激しい批判として現在顕現化しているものなのである。

この議論の焦点はテキストの実体性を完全に否定するか否かにある。つまり、イーザーの読書理論では、ガダマーやリクールと同じくテキストの

確定性は排除され、それに代わって、読者の「読みの行為」を通して産出されるテキストの意味が強調される。これが今述べた「作品」なのである。したがって、イーザーの狙いはこの「作品」が作り出されるテキストと読者の相互行為のプロセスの解明であり、イーザーがこのプロセスの考察に当たって示唆に富む分析を行なっていることは確かではないだろうか。しかし、イーザーは同時に、テキストに内在された意味を完全に打ち消してはいない。これがイーザーのいう「内包された読者」<sup>56</sup>である。つまり、先に見たリクールが解釈の方向性を提示したのと同じように、イーザーでは、読者による「読み」は「内包された読者」として既にテキストの中に潜在しているのである。したがって、読者による「読みの活動性」はこのテキストが指し示している方向性の中で、潜在したテキストの意味の可能性を現実化することを役目とする。しかもイーザーの場合、この意味の具体化のプロセスは、シュミットが批判するように、「ある客観的な規模のテキストが、ある客観的な規模の受容者と出会い、両者が同一基盤で相互に交流する」<sup>57</sup>ことにすぎない。テキストの意味は言わば読書行為によってテキストから「引き出される」のであって、受容者側に全面的に委ねられているのではないのである。

したがって、イーザーのこの言わば保守的な相互行為モデルに対して、英国ではイーグルトン (T. Eagleton)<sup>58</sup> のようなマルクス主義的な立場に立つ文芸批評家、あるいは米国ではホルプ (R. C. Holub)<sup>59</sup> の最近の受容理論研究の中で、そして西ドイツではいわゆる「経験的文芸科学」を提唱するシュミットやグレーベン (N. Groeben) らによって厳しい批判が出されているのである。

例えば、シュミットの場合、テキストの内文的意味は完全に否定されている。シュミットによれば、テキストやコミュニカートは各人の認知領域の中で「有意義な大きさ」を持つだけであり、「テキスト」は最早意味の担い手ではないのである<sup>60</sup>。また、ヘーリンガー (H. J. Heringer) も最

近の論文でこのシュミット同様、外部から説明可能なテキストの意味や理解が存在しないことを明示している<sup>61</sup>。そして、グレーベンはこのような議論の中で、テキストの「受容」(Rezeption)と「解釈」(Interpretation)を理論的に区別する必要を唱えている<sup>62</sup>。グレーベンによれば、個々の読者によって受容され、具体化されるテキストの「意味」(Bedeutung)と、文学テキストの学問的・専門的な解釈によって構築される「意味」(Sinn)とは峻別されなければならないのである。つまり、解釈は最早特権的な行為ではなく、コミュニケーション・システムの中で科学的・経験的検証を受けるべき対象なのである。解釈学的な方向との間に大きな隔たりが生み出されていることが分かるであろう。

次にもう1つ、「テキスト理解」について記しておきたい。このようにテキストの受容ないし加工のプロセスを重視する方向は、当然そこにおける「理解」の過程を問うことになる。この点で、「テキスト理解」の問題は現在テキスト研究の大きな課題になりつつある。早くに「理解はいかにして可能となるか」を問いかけたのはガダマーであり、この意味においては、解釈学とテキスト言語学がやはり相互に隣接した位置にあると言えなくもない。しかしながら、前述したガダマーの言語学批判から察せられるように、「理解」のとらえ方が大きくすれ違っているのである。今日のテキスト言語学は認知科学の領域に接近している。だから、そこでは、「理解」のプロセスは「認知」のプロセスに置き換えられる。認知科学は人工知能研究に始まるものであり、グラフ(S. H. Graff)が指摘するように<sup>63</sup>、認知科学の基本思想は人間の精神的プロセスを情報処理プロセスとしてとらえることなのである。

しかし、このような認知システムとして「理解」を究明しようとする考え方は解釈学にはない。解釈学にとって「理解」は何か還元できるものではなく、むしろ、還元不可能性を本質とするのではないだろうか。そして、「理解」は既に論じてきたように、自己の理解を目指すものであり、

この自己理解を通しての絶えまない主体確立の過程なのである。テキストを読み、解釈することを契機として生まれる経験の構造的変革こそがガダマーからリクル、イーザー、そしてフランクにつながるテキスト解釈学の視点なのである。歴史によって規定された人間、この人間が歴史に規定されながらも歴史を創造してゆくこと、この意味創造のプロセスがテキスト理解のプロセスに外ならない。だから、フランクはこの意味において、「コミュニケーションは歴史のプロセス」<sup>64</sup>であり、このプロセスは「相互主観的に制御された具体化、もしくは加工のプロセスで置き換えることのできない」<sup>65</sup>のものであるとするのである。

この点で、「テキスト理解」に関する食い違いも明白であろう。確かに認知科学的な立場においても、人工知能研究の初期段階に見られた機械的な「理解」のとらえ方に対しては批判が出てきている。例えば、心理学者のヘールマン (H. Hörmann) は「理解」の研究においては人工知能研究の中で無視されていた多様な側面への配慮が必要であることを説いているし<sup>66</sup>、シュミットも人間の感性や創造性を含めた形で、「理解」を「情報処理プロセス」としてでなく、「構成プロセス」として解明すべきだとしているのである。しかし、このような論点を加味したとしても、解釈学にとっては批判の対象でしかないだろう。短絡的かもしれないが、解釈学は理解のプロセスそのものより、理解によって生み出されるものへ常に視線を送っているように思われるからである。

したがって、このような観点を踏まえて、解釈学の「テキスト」の概念をここに明確にするなら、それはエーコ (U. Eco) のいう「開かれた作品」に集約されると考えられる。この「開かれた作品」に対するエーコの定義は、「解釈の変動と視点の移動を許容し協調させる 確定的な構造特性を備えた対象」<sup>67</sup> というものであり、それは「形と開放性の弁証法」から生み出される。つまり、「開かれた作品」は、テキストの確定性に疑問符を打ち、代わって、テキストを受容構造に組み込む。そして、そこでの読者と

の共同作業を通しての意味の生産性を要求する。しかし他方で、「開かれた作品」はあくまでも「作品」としての自己の同一性を失うことはない。エーコが「開かれた作品」の概念によって見極めようとするのは、まさしくこの開放性と同一性の限界点なのである。つまり、作品が恣意性を含む様々な解釈に開かれ、無秩序な状態に最大限に接近しながらも、「作品」はなお「作品」としての同一性を失わない、そのような限界点である。この限界点は一方で「作品」概念の危機である。しかし他方、「作品」はこの危機的状况の中で最も高度な生産性を獲得している。それは丁度、白熱した討論が一つの論題に向けて真剣に取り交わされているような場に喩えることのできるものである。作品の意味はこのようなき最も多産的である。

したがってまた、「開かれた作品」は文学作品でなければならない。なぜなら、エーコによれば、芸術作品は「根本的に多義的なメッセージ」<sup>68</sup>を送り、解釈の多様性を誘発し、作品を生産的にするからである。フランクも同様の見地から文学テキストは「その文学性の故にそもそも独自の理解を必要とする形成体である」<sup>69</sup>ことを記している。クルツがテキストの書記性に固執したのも、書記性がテキストの文学性に連続しているからである。ガダマーやリクールが文学解釈にこだわるのも同じ視点である。新しい「経験」の開放は日常的なテキストではなく、文学作品との相互交流の中で典型的な形で遂行される。しかし、〈開かれた〉〈作品〉とは既に形容矛盾ではないだろうか。最後に「相互テキスト性」(Intertextualität)に触れておかなければならない。

「テキスト」を「文学テキスト」に限定すること、このことを閉鎖的な議論としてのみ受け止めるべきではない。コセリウ<sup>70</sup>や、新しく「テキスト社会学」の分野を提唱しているツィーマ (P. V. Zima) が触れているように<sup>71</sup>、多様な意味作用を持つ文学テキストに関する機能の究明は、他のテキスト種類の問題にも当然糸口を与えると考えられるからである。しか

し、「テキスト」は「作品」ではない。なぜなら、「テキスト」の本質は「相互テキスト性」にあるからである。ボウグランド(R. A. Beaugrande) / ドレスラー(W. U. Dressler)の「相互テキスト性」の定義を引用しておこう。「ある1つのテキストの使用は、1つまたは幾つかのすでに摂取されているテキストに依存する。」<sup>72</sup>つまり、「テキスト」は「作品」としての自律性を最早持たないのである。ある文学テキストの意味作用は他のテキストとの相互関係の中で生起する。例えば、同じ作家による別のテキスト、同じ時代の他のテキスト、同種のテキスト型の中の他のテキスト、これらの連関したテキスト間の関係の中で、1つのテキストの意味は生成されてゆく<sup>73</sup>。したがって、テキストの意味はバルト(R. Barthes)が言うように、「複数的」であり、「横断的」である<sup>74</sup>。言わば「相互テキスト性」はこの意味で、意味の織物(Textur)としての「テキスト」のことであり、錯綜した社会関係をディスプレイしたものである<sup>75</sup>。しかも、このテキスト間の連関は創造的である。1つのテキストに言及すること、それはそのテキストとの関連で別の新しいテキストを生産していくことである。この点で、「相互テキスト性」はテキストの「開放性」の中核的概念に外ならない。現在、テキスト言語学の分野だけでなく、エーコに代表される「テキスト記号論」の中で、このテキスト間の関連性の問題は、「フレーム」、「スキーマ」等の概念との関係で考究され始めつつある。したがって、小論の次の課題はこれらの研究に焦点を合わせることであろう。しかし同時に、この方向の中で、〈開かれた〉〈作品〉という制約された「開放性」の概念が崩壊してゆくことも確かなのである。

#### 注

- 1 W. Klein/U. Nassen, *Textlinguistik und Texthermeneutik*. In: U. Nassen (Hrsg.), *Texthermeneutik*, München 1979, S. 23-36.
- 2 G. Kurz, *Hermeneutische Aspekte der Textlinguistik*. In: *Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen* 129, Bd. 214, 1977, S.

- 262-280. ders., *Textlinguistik—Texthermeneutik*. In: *Muttersprache 88*, 1978, S. 263-269.
- 3 E. Coseriu, *Textlinguistik*, Tübingen 1981, S. 35.
- 4 シュミットはレクセームがもっている抽象的・概念的な「意味」に対して Sinn の語を当て、テキスト・レベル、あるいは受容過程において実現された「意義」については Bedeutung の語を使っている。したがって、Sinn と Bedeutung についてのシュミットの区別の仕方は、言語内的意味 (Bedeutung) と言語外的指示 (Bezeichnung) からテキストの「意義」(Sinn) がつくり出されるとする コセリウの分類とは明らかに異なっているし、またヴァインリヒ (H. Weinrich) が『うその言語学』の中で明示した Sinn と Bedeutung の定義とは全く正反対のものとなっている。Vgl. S. J. Schmidt, *Texttheorie*, München 1976, S. 85. H. Weinrich, *Linguistik der Lüge*, Heidelberg 1974, S. 15-25. なお、小論では支障のない限り「意味」の語を使っている。
- 5, 6 H. G. Gadamer, *Wahrheit und Methode*, 5. Aufl., Tübingen 1986, S. 281.
- 7 H. G. Gadamer, *Mensch und Sprache*. In: *Kleine Schriften 1*, Tübingen 1967, S. 95.
- 8 H. G. Gadamer, *Text und Interpretation*. In: P. Forger (Hrsg.), *Text und Interpretation*, München 1984, S. 33.
- 9 H. G. Gadamer, *Sprache und Verstehen*. In: *Kleine Schriften IV*, Tübingen 1977, S. 94.
- 10 Gadamer (1986), a. a. O., S. 276 f.
- 11 Ibid., S. 264.
- 12 解釈学の歴史については特に次の文献を参考にしている。麻生建『解釈学』1985年 世界書院。
- 13 Gadamer (1986), a. a. O., S. 281.
- 14 Ibid., S. 305.
- 15 Ibid., S. 301.
- 16 Gadamer (1984), a. a. O., S. 35-36.
- 17 W. イーグルトン『文学とは何か』大橋洋一訳 1985年 岩波書店 115ページ以下参照。
- 18 丸山高司『解釈学と分析哲学』(「思想」5月号1984年329ページ以下)
- 19 S. J. Schmidt, a. a. O., S. 45.
- 20 Ibid., S. 149.
- 21 Ibid., S. 45.
- 22 E. Gülich, *Textsorten in der Kommunikationspraxis*. In: W. Kallmeyer (Hrsg.), *Kommunikationstypologie*, Düsseldorf 1986, S. 21.

- 23 Gadamer, (1986), a. a. O., S. 264.
- 24 W. Iser, *Der Akt des Lesens*, München 1984, S. 215.
- 25 Gadamer (1986), a. a. O., S. 297.
- 26 Ibid., S. 310.
- 27 Gadamer (1984), a. a. O., S. 40.
- 28 Ibid., S. 45.
- 29 P. Ricœur, *The Model of the Text: Meaningful Action Considered as a Text*. In: P. Rabinow/W. M. Sullivan (ed.), *Interpretive Social Science*, 1979, Univ. of California Press. S. 73-101. (独訳: *Der Text als Modell: hermeneutisches Verstehen*. In: H. G. Gadamer/G. Boehm (Hrsg.), *Seminar: Die Hermeneutik und die Wissenschaften*, Frankfurt a. M. 1978, S. 83-117.)
- 30 O. F. Bollnow, *Paul Ricœur und die Probleme der Hermeneutik*. In: *Zeitschrift für Philosophische Forschung* 30, 1976, S. 167-189.
- 31 Ricœur, a. a. O., S. 94 f.
- 32 拙論『テキスト言語学研究(一)——二つの「方向」をめぐって——』(関西大学院生協議会編「千里山文学論集」33号 1985年 22-45ページ。)
- 33 Vgl. K. Brinker, *Linguistische Textanalyse*, Berlin 1985, S. 12 f.
- 34 Ibid., S. 14.
- 35 K. Brinker, *Zum Textbegriff in der heutigen Linguistik*. In: H. Sitta/K. Brinker (Hrsg.) *Studien zur Texttheorie und zur deutschen Grammatik*, Düsseldorf 1973, S. 23.
- 36 Ricœur, a. a. O., S. 74 f.
- 37 Ibid., S. 75 f.
- 38 Iser, a. a. O., S. 257 f.
- 39 Ricœur, a. a. O., S. 76.
- 40 Bollnow, a. a. O., S. 172.
- 41 Ricœur, a. a. O., S. 77.
- 42 Ibid., S. 79.
- 43, 44 Ibid., S. 98.
- 45 ポール・リクール 『解釈の革新』 久米博/清水誠/久重忠夫編訳 1985年 白水社 63ページ。
- 46 Kurz (1978), a. a. O., S. 264.
- 47 P. Hartmann, *Texte als linguistisches Objekt*. In: W. D. Stempel (Hrsg.), *Beiträge zur Textlinguistik*, München 1971, S. 12.
- 48 Kurz (1978), a. a. O., S. 265.
- 49 Ibid., S. 267.

- 50 Brinker (1985), a. a. O., S. 11.
- 51 書記的実現と音声的実現の区別からテキストの定義を導き、またそれを絶対視しようとする解釈学的思考に対して、クラインとナッセンはビューラー (K. Bühler) が記号使用の分類として立てた著名な sympraktisch/synsemantisch の区別を抛り所にして批判を試みている。(Vgl. Klein/Nassen, a. a. O., S. 34.)
- 52 S. J. Schmidt, *Text und Kommunikat.* In: A. Wierlacher (Hrsg.), *Fremdsprache Deutsch Bd. 1*, München 1980, S. 176-191.
- 53 T. A. van Dijk, *Textwissenschaft*, Tübingen 1980, S. 33.
- 54 M. Scherner, *Sprache als Text*, Tübingen 1984, S. 160.
- 55 Iser, a. a. O., S. 39.
- 56 Ibid., S. 50 f.
- 57 S. J. Schmidt, *Texte verstehen—Texte interpretieren.* In: A. Eschbach (Hrsg.), *Perspektiven des Verstehens*, Bochum 1986, S. 89. (邦訳: 杉谷眞佐子訳 『テキスト理解—テキスト解釈』『独逸文学』31号 1987年 168-203ページ。)
- 58 イーグルトン 前掲書 116ページ以下参照。
- 59 R. C. Holub, *Reception Theory*, London/New York 1984, S. 82 f.
- 60 Schmidt (1986), a. a. O., S. 89.
- 61 H. J. Heringer, *Textverständlichkeit. Leitsätze und Leitfragen.* In: *Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik* 55, 1984, S. 58.
- 62 N. Groeben, *Empirische Literaturwissenschaft.* In: D. Harth/P. Gebhardt (Hrsg.), *Erkenntnis der Literatur*, Stuttgart 1982, S. 270,
- 63 S. H. Graff, *Verstehen als kognitive Prozeß.* In: *Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik* 55, 1984, S. 15.
- 64 M. Frank, *Textauslegung.* In: *Erkenntnis der Literatur*, S. 131.
- 65 Ibid., S. 126-127.
- 66 H. Hörmann, *Über einige Aspekte des Begriffs »Versehen«.* In: L. Montada/K. Reusser/G. Steiner (Hrsg.), *Kognition und Handeln*, Stuttgart 1983, S. 13-22.
- 67, 68 U. Eco, *Das offene Kunstwerk*, Frankfurt a. M. 1977, S. 8.
- 69 Frank, a. a. O., S. 132.
- 70 E. Coseriu, *Thesen zum Thema Sprache und Dichtung.* In: *Beiträge zur Textlinguistik*, München 1971, S. 185.
- 71 P. V. Zima, *Literatursoziologie/Textsoziologie.* In: *Erkenntnis der Literatur.* S. 162.
- 72 R. A. de Beaugrande/W. U. Dressler, *Einführung in die Textlinguistik*, Tübingen 1981, S. 12.

- 73 池上嘉彦 『詩学と文化記号論』 1985年 筑摩書房 182ページ。
- 74 R. Barthes, *From Work to Text*. In: J. V. Harari (ed.), *Textual Strategies*, Ithaca/New York 1984, S. 74 f.
- 75 U. Eco, *Texts and Encyclopaedia*. In: J. S. Pötefi (ed.), *Text vs Sentence 2. Part*, Hamburg 1979, S. 592.

上記の文献の他、小論の作成に当たっては、昭和61年度関西大学大学院における鷺田清一先生（哲学科）の講義『行為論』から多くの示唆を受けることができた。もちろん、本稿の責任はすべて筆者にあるが、ここに記して感謝の意に代えたい。

# Hermeneutik und Text

—eine Sicht zur Offenheit—

Yasuyuki Sugatani

Was für ein Verhältnis besteht zwischen der sogenannten Texthermeneutik und -linguistik? Im Einklang mit der raschen Entwicklung der Textlinguistik seit den 70er Jahren entwickelten sich zwei hermeneutische Positionen gegenüber der Textlinguistik. Wissenschaftler wie Wolfgang Klein und Ulrich Nassen vertreten die Möglichkeit der Kooperation beider Bereiche; anders Gerhard Kurz und Manfred Frank, welche eine scharfe - ja sogar spöttische - Kritik an der Textlinguistik üben

Auch auf der Seite der Textlinguistik ist das Verhältnis zur Hermeneutik nicht einheitlich. Eugenio Coseriu behauptet, daß die Textlinguistik Hermeneutik sei. Er sieht die Untersuchung zum Generieren und Verstehen des „Textsinns“ als Aufgabe der Textlinguistik an. Siegfried J. Schmidt hingegen lehnt den in der Hermeneutik üblichen Gebrauch des Wortes „Sinn“ ab und damit einen wichtigen Begriff der langen hermeneutischen Tradition. Er übt stets Kritik an der Textinterpretation in der Literaturwissenschaft.

Angesichts dieser unklaren Beziehung beider Bereiche sucht die vorliegende Arbeit, den Textbegriff der Hermeneutik zu klären. Meines Erachtens ist es auch für die Textlinguistik sehr wichtig, abzuklären, auf welchen Textgriff sie sich beruft, und warum sie die Textlinguistik kritisiert. Als Vertreter der gegenwärtigen Texthermeneutik wurden im vorliegenden Aufsatz Hans G. Gadamer und Paul Ricœur behandelt. Das Ergebnis ist in den folgenden drei Punkten zusammengefaßt:

1) Der Text ist nach Umberto Eco, im Sinne der Hermeneutik, ein „offenes Werk“. Seit Gadamer reduziert die Hermeneutik den Sinn des literarischen Textes nicht mehr nur auf die Intention des Verfassers. Die Eindeutigkeit des Textes ist negiert, d. h. der Text ist in eine Struktur der Rezeptionsbeziehungen einbezogen. In diesem Sinne ist die Rolle der „Interpretation“ in der Hermeneutik von wichtiger Bedeutung. Denn die Textinterpretation bedeutet nun nicht länger eine Rekonstruktion des Sinns innerhalb des Textes. Sie ist ein Prozeß, der durch die Interaktion mit dem Text einen neuen Sinn erzeugt. Der Text hat stets eine Unbestimmtheit. Mit einem Wort P. Ricœurs wird durch die Interpretation „vor dem Text“ eine neue Welt eröffnet.

2) Nicht nur der Sinn des Textes wird je nach Interpretation verändert. Auch die Interpret verändert sich selbst. In diesem Sinne hält die Hermeneutik die Offenheit der Erfahrung für wichtig. Durch den Dialog mit dem Text überschreitet man den Horizont des eigenen Verstehens. Ein neues „Sichverstehen“ wird geboren. Mit diesem neuen Selbstverständnis gewinnt der Interpret eine neue Perspektive und baut sich eine neue Welt auf. Besonders betont die Hermeneutik den Moment dieses Lesenserlebnisses, denn gerade dieser Moment selbst ist ein geschichtlicher, dynamischer Kommunikationsprozeß. In diesem Punkt kritisiert die Hermeneutik die Textlinguistik. Denn diese Umstrukturierung der Erfahrung wird möglich nur in unendlich wiederholter Wechselwirkung zwischen dem, was der Text erzählen will, und dem Interpreten. Doch die Textlinguistik untersucht immer nur, wie der Text produziert, rezipiert und verarbeitet wird, nicht was der Text „redet“. Entsprechend dieser hermeneutischen Kritik versäumt die Textlinguistik den wichtigsten Moment der Textforschung.

3) Aber der Ausdruck des „offenen“ Werkes ist an sich schon widersprüchlich. Für die Hermeneutik darf das Werk offen bleiben. Das Werk ist offen für die verschiedenen Interpretationen, muß aber eine Einheit darstellen. Aber die Hermeneutik

will nicht sehen, daß das Werk selbst schon eine Textur der pluralen Bedeutungen ist. Der Text hat immer Bedeutung in der Relation mit anderen Texten. Ein Text bekommt Signifikation im Zusammenhang mit anderen Texten, wie z. B. einem Text desselben Verfassers oder aus derselben Zeit, oder derselben Textsorte usw. In diesem Sinne wird der Text von der Interpretation nicht fixiert. Und andererseits heißt über einen Text zu reden schon einen anderen Text zu produzieren. Wahrscheinlich ist der interessanteste Bereich der Textforschung eben der, der versucht, diese konzentrische Kreise der Intertextualität klar zu machen. Aber der Textbegriff der Hermeneutik versäumt diese wichtigste Perspektive.